

沖縄糸満市戦没者を二度死なせてはならない

金性済（日本キリスト教協議会 総幹事）

これまで、私はプロテスタント・キリスト教に属するものとして「平和をつくり出す宗教者ネット」（以下、宗教者平和ネット）に加わり、憲法9条に基づく平和を祈り、守る運動に参加してきました。この宗教者平和ネットで中心的にはたらかれる武田隆雄上人（日本山妙法寺）がたが去る11月17日に沖縄本島南部で、30年以上、戦没者の遺骨収集に取り組んでこられた具志堅隆松さんとの出会いを通して、辺野古基地建設用の土砂採取のために具志堅さんの遺骨収集を遮るように、遺骨を含んだまま日本政府防衛省／沖縄防衛局が業者を使って土砂採取を推し進めようとしている実態について聞かれた報告を、私は宗教者平和ネットの報告集会で知るようになりました。

その時私たち、宗教者の心に火が付くように、この問題に宗教者は沈黙してはならない、という思いを抱くようになったと思います。旧日本軍大本営の無謀な命令によって推し進められた沖縄戦における悲惨な無念の死をとげた日本兵、沖縄住民、そして植民地統治下の朝鮮から連れてこられた人々の魂の叫びを、まるで辺野古の海に沈め、かき消し、それだけに飽き足らず、さらなる戦地への出発地となる基地建設のために遺骨を含んだ土を利用するという事は、死者とその遺族に対してなんという冒とくと無礼極まりない行為であるか。この深刻な暴挙について、とりわけ宗教者は座視してはならない、という思いに、私たち、宗教者平和ネットは至りました。その結果、12月10日に、急遽作成し取りかかり、各宗教から募った賛同署名を付けた宗教者共同声明をもって私たちは緊急記者会見を参議院議員会館で行いました。

さらに、宗教者平和ネットは、12月16日にオンラインで具志堅隆松さんにつながりながら、議員会館で集会を開催し、遺骨を、死者たちが死ぬ前に名を呼んだ母の眠る地に返してあげたいという具志堅さんの切なる思いを、集会に集った人々に伝えることができました。

このような経緯から、去る12月21日から23日にかけて、武田隆雄上人、有村文江姉、そして私は沖縄を訪ね、22日に沖縄県庁記者クラブでの記者会見、そして沖縄県関係部署担当者との話し合いを、沖縄県内から駆けつけてくださった、平和運動のリーダーや宗教者がたと共に行いました。翌23日には具志堅さんの案内により、土砂採取が行われ、現在一時中断している現場（熊野鉦山）に行き、業者によって立ち入り禁止とされた縄の外に祭壇を築き、そこでそれぞれの宗教からの平和の祈りをささげる追悼慰霊の時間が催されました。またその後、近隣に所在するガマで具志堅さんが現在、遺骨収集を進めておられるところを案内され、実際にそこで収集された遺骨の一部を見せて頂くことができました。うっそうと茂る木々に囲まれたガマでは、具志堅さんの説明を通して、炸裂する砲弾によって兵士のみならず、婦女子に至るまでどんなに凄惨な死がとげられたか想像させられ、戦慄と深い悲しみを覚えるばかりでした。

その後、糸満市庁を訪ね、市の担当職員がたとの話し合いを交わし、その議論の暁に、糸満市が具志堅さんの遺骨収集の現場を視察することを約束してくれたことは、大変有意義なことでした。

糸満市庁での話し合いにも参加して下さった宗教者や市民運動の方々と、私たちは、東京に戻ったのちにも引き続き、この問題を広く、宗教者をこえて市民に訴えながら、沖縄での取り組みと連携して、これからも共に闘っていこうと約束し合うことができました。

私たちは、「魂魄の塔」をはじめとする慰霊碑をもって戦没者を慰霊しておきながら、その精神を自ら踏みにじり愚弄するかのような、遺骨を含む土砂採取を許してしまうならば、今後、沖縄、日本全国のみならず、世界から、その愚かしい自己矛盾を問われ続けることになるでしょう。

「ちもぐるさん（肝がねじれるほど苦しい）」「ぬちどう宝（いのちこそ宝）」の精神について、私たちは宗教者として信仰の地平に立ち帰り、この度の沖縄戦戦没者の遺骨問題の深刻な意味を知ることを通して、改めて思いを深められることにより、いのちと死の深淵な意味に目を開かれながら平和への志を新たにされる体験をすることとなりました。天と地、死者と生者とが深く霊的につながれた平和への祈りの叫びとして、私たちは、この遺骨を含む土砂採取に抗議し、また一時中断中の土砂採取に反対する声を、沖縄、日本の津々浦々、そして世界に訴えていく課題を、2021年に向かって厳かに覚えます。